

肯定・検索・問い合わせ —— 感動詞「ええ」の統一的記述を求めて ——

富 横 純 一

0. 問題の所在

感動詞「ええ」には、イントネーションの異なりによる3種の機能が認められる。

- (1) エエ、 そうですね。
- (2) エエ？ そうなんですか？
- (3) エエー、 なんでしたかねえ。

(1) は下降調イントネーションで、肯定や承諾を示す。(2) は上昇調イントネーションで、いわゆる問い合わせを表す疑問の表現である。(3) は高平調イントネーションで、何かを考えている最中、つまり検索中であることを示す。このように、「ええ」という感動詞は形式的には同じであるが、異なるイントネーションが与えられることによって、(見かけ上は)全く違う意味・用法を示す*1。

形式が同じであるにもかかわらず、イントネーションの異なりのみで何故、このような機能の違いが生じるのだろうか。本稿では3種の「ええ」の機能を、「ええ」が持つ固有の機能と3種のイントネーションとの組み合わせによって生じる合成的なものである、と捉える。

したがって、本稿の目的は、感動詞「ええ」の統一的記述、つまり「ええ」に内在する本質的機能の導出となる。ただし、上で挙げた3種の「ええ」を個別に分析した論考は数多く、分析に当たってはこれら先行研究での知見を踏まえた形が妥当であるといえる。本稿では3種の「ええ」それぞれについて、先行研究の知見に新たな分析を加えるという手順で機能の導出を行い、それを基に「ええ」の統一的な記述を試みる。

なお、以降はこの3種の異なりを次のように表記する。

- (4) 「ええ↓」：肯定 (下降調イントネーション)
- (5) 「ええ↑」：問い合わせ (上昇調イントネーション)
- (6) 「ええ→」：検索 (高平調イントネーション)

具体的な構成は以下の通りである。議論の都合上、検索の「ええ→」を最初に取り上げ、肯定、問い合わせの順で進めていく。

- (a) 「ええ→」：先行研究の検討と概念の規定
- (b) 「ええ↓」：主に「はい」との比較によるアプローチ
- (c) 「ええ↑」：先行研究の批判的検討

次節ではこれらの議論の前提となる概念について触れておく。

1. 理論的前提

感動詞の機能に関しては、田嶋・金水（1997）で示されたように（(7)），話し手の心内処理との関係でその本質を捉えるのが有効な方法である。

- (7) 「感動詞、応答詞は、外部からの言語的・非言語的入力があったときの話し手の内部の情報処理状態の現れと考えるとその機能をとらえることができる。対話の際、新規の入力があれば、対話者は、この入力に対応して特定の心的情報処理状態へ移行する。これらの形式は、それぞれの心的処理状態に対応したフラッグのような役目を果たす」

（田嶋・金水（1997），p.261）

また、感動詞を構成する一要素であるイントネーションも独立した心内処理と関連付けられている。この捉え方自体は目新しい考えではなく、定延・田嶋（1995）や田嶋・金水（1997）でも述べられているとおり、いわゆる超分節的要素として位置付けられている。

- (8) 「感動詞も、或る種の子音・母音の組み合わせとしてセグメンタルな基本形態がとらえられる。これにさらに音調（や特殊拍の使用／不使用）など韻律要素が加わって具体的な単位となり、それぞれ特定の心的操作

状態に対応する」 (定延・田窪 (1995), fn. 1)

- (9) 「これらの「H化, 長音化, 促音化, 音調変化」はそれぞれ独立した心的機能に対応し, 感動詞標識とでもいえる役割を果たす。ここでは, これらの音の変化は, 分節音 (segmentals) に対応するモジュレーション, つまり, 超分節的要素 (supersegmentals) である」

(田窪・金水 (1997), p.263)

この指摘を見ても 3 種の「ええ」の機能は、「ええ」という形式 (形態) が持つ心内処理の標示機能と個々のイントネーションが持つ心内処理の標示機能との合成によって作り出される, と考えて問題ないといえる。感動詞のバリエーションを見る場合, この点に意識を向けることが重要となってくる。

上記の前提に基づいて, 3 種の「ええ」の機能的な特徴を分析していくことにする*ⁱ。

2. 検索の「ええ→」

まず, 検索の「ええ→」について考えてみる。高平調イントネーションで発話される「ええ→」は, 心内において検索処理の最中であることを示すと捉えられるだろう。検索という概念に関しては, 感動詞と検索処理との関連を扱った論考である定延・田窪 (1995) が参考となる。定延・田窪 (1995) では「ええと」「あのー」という 2 形式を対象とし, それぞれが対応する検索処理の異なりを詳細に分析している。そこで「ええと」の記述はほぼ「ええ→」にも当てはまると思われる。

(10) 「ええと」の基本的用法

談話中に必要となる心的作業 (たとえば検索や計算) の中には, 結構手間のかかるものがある。話し手がこれをおこなう際には, 話し手の意識を小容量の心的バッファから大容量の心的データベースに戻すことによって演算領域を確保する (つまり心的バッファを占めている様々な情報を一時「頭の片隅」に追いやって集中力を高める) という, 検索や計算などのための予備的な心的作業が必要になることがある。「ええと」は, 話し手がいったんこの予備的な心的作業に入っていること (入りつつ, 当該の検索や計算をおこなっていること) を表す」

(定延・田窪 (1995), p.78)

つまり、獲得した情報の処理のために心内の別の領域へとアクセスし、何らかの検索・計算を行っていることを示すのが「ええと」なのである。基本的に「ええと」と「ええ→」はほぼ同一の機能を有しているといえる。「ええと」と「ええ→」は完全に互換があり、そこに機能的差異は見出しづらいからである。例えば、(11) や (12) の「ええと」を「ええ→」に置き換えたとしても違和感はなく、同じ検索処理を標示していると考えられる^{*3}。

- (11) 一郎：1234足す2345は？

次郎：ええと、3579。 (定延・田窪 (1995), p.83改)

- (12) ええと、今日は何をしようかなー。

また、定延・田窪 (1995) が示した、心的バッファと心的データベースを富横 (2002a) では以下のように再規定した。

- (13) バッファ →活性化した情報が格納される

データベース→バッファにある情報に関連した情報が格納される

(富横 (2002a), p.103)

バッファにある情報を活性情報とし、データベースにある情報を半活性情報と捉え、その関連性の存在が感動詞の記述において有効であることを示した^{*4}。これに即してみると、「ええ→」は何らかの検索処理のためにデータベース（半活性情報）へアクセスしていることを示すといえる。定延・田窪 (1995) の「領域を確保」することと、情報にアクセスすることは厳密には同一の処理と言えないが、どちらにしろ、処理の場所はデータベースであり、「ええ→」がそこでの処理を標示していることに変わりはない。

検索において必須となるのは、「探索意識」あるいは「探索課題」（いずれも定延 (2001) の用語）である。きっかけや手懸かりがなく、ただ漠然と何かを探し始めることはありえない。例えば、(11) のような数値の計算では与えられた式が検索のきっかけとなる情報であり、(12) では「何かをする」という曖昧な情報が検索のきっかけとなっている。したがって、データベースへのアクセスの前提として何らかの情報が必須であるといえる。

もっとも、そもそも検索行為自体が、現状から一旦離れることを前提としている。現状にないモノ・コトを探すのが検索だからである。それが話し手の心内で行われれば、当然、現状（＝バッファ）から離れることになり、データベースへのアクセスと位置付けられる。

補足ではあるが、「え」に対する「ええ」のような長音化そのものが検索処理の標示を担っていると考えるべきかもしれない。「え」に限らず、「あ」や「う」、あるいは文節末においても、長音化、いわゆる語尾を伸ばした発音をすると、考えながら話しているという検索状態の発現として解釈されやすい。

(14) あー、今日はー、うー、えー、何をー、しゃべるんでしたっけねー。

(14)で検索を示している部分はどこかと問われても、「えー」だけを殊更に取り出すことはしないだろう。

3. 肯定の「ええ↓」

「ええ↓」はいわゆる応答詞の一つとして、類似の機能を示す「はい」や「うん」との比較に基づいた分析が行われている。

3.1. 先行研究：「ええ↓」

肯定の「ええ↓」に関して諸特徴を論じたものに、北川（1977）、田嶋・金水（1997）が挙げられる⁵⁵。それぞれの論考における「ええ↓」の記述を見てみる。

(15) 「「え、」は相手の言ったことに対しての自分の気持の動きを表出する声であって、下降のイントネーションではっきり言い切る場合には「自分もそのように思う」という気持を表出することになる」

(北川 (1977), p.66)

(16) 「文頭に現れる「はい、ええ」等は、相手の発話を入力した承認(acknowledgement)の標識であり、文末に現れる「はい、ええ」は、相手に対して出力したことの承認の標識である」

(田嶋・金水 (1997), p.264)

北川（1977）は「はい」と「ええ」の差異を「承諾・肯定の意」の有無に還元している。「はい」は単なる応声でそこに肯定の意味はなく、「ええ」には「相手の言ったこと」を理解した上でそれに同意するという意味がある、としている。

- (17) 客 「新橋一枚。」
 駅員 「……はい、60円のおつり。」 (北川 (1977), p. 67)

(17) の「はい」を「ええ」に換えると不自然になるのは、「自分もそのように思う」ことがそもそも不可能な文脈だからである。切符とおつりを渡されたことに対して「そう思う」ことはできない。このことから、「相手の言ったこと」を理解し、さらにそれに同意する過程が「ええ」に必要であることが分かる。

一方、田窪・金水（1997）では心内処理の観点から、「はい」「ええ」を捉えている。しかし、(16)に引用したように、「はい」「ええ」に共通の機能として「承認」という概念（処理操作）を提示しているものの、個別の機能についての言及はなされていない。

両者の論考に共通するのは、「ええ！」が肯定あるいは承認という機能を持つという点である。さらに肯定・承認の前提として、直前の相手の発話に同意可能な状況である、という制約が認められる。

3.2. 分析：「ええ！」

上記の研究を踏まえて、より詳細な「ええ！」の分析を加えてみたい。富樫（2002b）では、肯定応答表現「はい」と「うん」の機能的な差異の一証左として次のような例を提示した。(18)はAとBの対話である。

- (18) (Aの自慢話は既に何度も聞いている)
 A 僕がここまで成功したのはですね、実力と運が両方あったから…。
 B はいはい、その話は聞き飽きましたよ。
 *うんうん、その話は聞き飽きましたよ。 (富樫 (2002b), p. 142)

(18) Bは、「はい」や「うん」が繰り返され、かつイントネーションの山が「低い山→高い山」と変化するパターンである。これを富樫（2002b）ではイントネーションパターン2と呼んだ。(18)を見ると、「はい」の連続はイント

ネーションパターン2が適用可能であるのに対し、「うん」の連続は不可能である^{**}。この違いから、「はい」という形式は（「うん」と比較して）複雑かつ多量の心内処理と関わっている、と指摘し^{††}、「はい」の機能を以下のように記述した。

- (19) 「はい」の機能：提示された情報に対し、それに連関した半活性情報
が多数呼び出されたことを示す

(富樫 (2002b), p.147)

半活性情報は、2節で規定したデータベースに存在する情報である。ある情報とそれに関連する情報が多量に結びつけられていることを示すのが、「はい」なのである。

イントネーションパターン2は「ええ↓」にも適用することができる。

- (20) A おやつ買っててくれる？

B ええ↓ええ↓、買ってきますとも、買ってきますとも。

(20) Bの発話は(18) Bの「はいはい」という発話と同様に、何らかの皮肉めいたニュアンスが加わっている。単なる肯定ではなく、「わざとらしさ」「承諾してやっている」といった含意が読み取れる。イントネーションパターン2は（皮肉を暗示させるという）複雑な処理を背景に成立しているので、それが適用できる「ええ↓」と「はい」はいずれも計算量の多い、複雑な心内処理と関わっていると仮定することができる。

北川(1977)の示した「自分もそのように思う」は、獲得した情報（活性情報）と話し手自身の知識との関連性を確認した上でないと判断できない行為である。この関連性はつまり、活性情報と半活性情報との連関であり、「ええ↓」の発話にはデータベースへのアクセスという心内処理が内在していると捉えることができるるのである。

また、「はい」と「ええ↓」の相違も、「自分もそのように思う」行為が絡んでくる。

- (21) (ドアのノックに反応して)

*ええ↓／はい。

(22) A あなたが帰ったのは何時頃ですか？

B *ええ↓／はい、7時頃です。

(21) (22) で「ええ↓」だけが不自然となるのは、直前の発話や行動に情報的なまとまりが無いためであるといえる。このまとまりとは、データベースと適切に関連付けられるレベルでの情報的有意性である。(21) はノックという単なる物理的な音であり、そこに何らかの情報的なまとまりを見出すことは難しい。ノックの音が、「誰ですか？」といったような次の処理への引き金にはなるであろうが、音そのものが格納されるべき情報である可能性は低い。(22) ではAの発話が疑問詞疑問文である。疑問詞で示される要素があるということは、情報として未確定であり、その点でまとまりを有していないと捉えられる。

ここから分かるのは、有意あるいは確定的な情報のまとまりと「ええ↓」とが密接な関係を持っているということである。さらに次の例を見てみよう。

(23) A 家具売り場はこの階ですか？

B ええ↓／はい。**

(24) A 家具売り……。

B ??ええ↓／はい。

(24) のように、相手の発話がまだ完結していない段階で「ええ↓」で反応すると非常に不自然である。これもまた情報的まとまりが「ええ↓」に求められるファクターであることの傍証となる。

「ええ↓」と「はい」はデータベースへのアクセスという点では同じであり、田嶋・金水（1997）が「承認」として一括りにしたのは正しいといえる。しかし、「承認」にもレベルの違いが認められ、「ええ↓」は単なるデータベースへのアクセスではなく、有意な情報を獲得した後のアクセスに限定されているのである。よって、「ええ↓」は「はい」と比べると、使用範囲が狭くなる。

まとめると、「ええ↓」の本質を次のように記述することができる。

(25) 「ええ↓」：半活性情報との適切な関連性を確保したことの標示

有意な情報の存在を前提として、データベースにアクセスし、その情報の位置付けを処理した結果、適切な関連性が確保できたことを示すのが「ええ↓」で

ある。「はい」との違いは半活性情報の量的側面ではなく、質的側面（適切さ）にあるといえる。

この「ええ↓」の機能は、検索の「ええ→」が何らかの情報をきっかけとしていることと類似している。与えられた情報に対して検索の必要性が生じるのは、その情報を的確に把握したからに他ならない。肯定の「ええ↓」もまさに、的確な把握の上の判断なのである。

また、適切な関連性の処理には、情報が外部から与えられるという条件が必要になる。新たな関連性の判断は外部からの情報に対して行われるものであり、話し手が持っている情報は既に関連性の処理が終わっている。「ええ↓」が独り言で用いられないのは、適切であるというラベルを貼る処理が外部からの情報にのみ求められるため、と考えられる。

4. 問い返しの「ええ↑」

3種の「ええ」の最後として、問い合わせの「ええ↑」を見る。先行研究はいくつかあるが、いずれも形式としては「え↑」を対象としており、長音化形である「ええ↑」は扱われていない。先に述べたように、長音化そのものにも独立した心内処理が対応している可能性を考えると、「え↑」と「ええ↑」の違いにも言及する必要がある。しかし、ここでは先行研究の知見を踏まえるためにも、「え↑」と「ええ↑」の違いには特に留意しない^{*9}。

4.1. 先行研究：「ええ↑」

問い合わせの「え↑(ええ↑)」に言及がある論考としては、田嶋・金水(1997), 森山(1997a), 大浜(2001)が挙げられる^{*10}。それぞれの論考の概略を示す。

田嶋・金水(1997)では、「えっ」「はっ」「へえ」等の形式を問い合わせではなく「意外・驚き」というカテゴリーにまとめて分類している。その本質は心的レベルでの処理の失敗にあるとしている。

- (26) 「「意外・驚き」とは、対話のために準備された知識ベースと矛盾したり関連性が低かったりするような情報を受け取った、ということを表明することである」 (田嶋・金水(1997), p.266)
- (27) 「入力は成功し作業バッファーにポインターを作成したが、データベースに登録する際のアドレスをつけそこなった、あるいは、データベ

ースの要素にリンクできなかった、などの場合である」

(田嶺・金水 (1997), p.267)

ここで要点となるのは、データベースへの「登録」「リンク」という処理である。獲得した情報がどのようなものであるかを確認するためにデータベースにアクセスすることが前提となり、その処理の結果的な失敗が「えっ」や「はっ」で標示されているのである。

森山 (1997a) では、一語文に付される上昇イントネーションの分析を試みたものである。一語文全般が対象となっており、感動詞の類の独立語文と上昇イントネーションの組み合わせについても言及している。

- (28) 「このような遭遇反応を表すもの（富樫注：あれ／おや／まあ／え）は、通常の自然下降で使われることもあるが、上昇イントネーションは、さらに「どうしたのか、何がおきたのか」というように、遭遇事態について、探索が未完了であるといった意味を表す」

(森山 (1997a), p.80)

「あれ↑」「おや↑」や「え↑」のような形式が持つ意味を田嶺・金水 (1997) と同様に抽象化した形で示している。(28)での「探索」は定延・田嶺 (1995) の検索と同等の概念であろう。探索が未完了ということは、探索を開始していることが前提となる。すなわちデータベースへのアクセスが行われた上で処理の「未完了」であるといえる**。

大浜 (2001) は談話における「えっ」の働きを分析したものである。「えっ」は非自発的な会話の主導を行うために用いられるとしている。積極的な会話展開ではなく、非自発性を前面に出すことによる（ある意味消極的な）展開のための表現である。大浜 (2001) では、「えっ」の機能を次のように捉えている。

- (29) 「外部のコンテクスト（言語的・非言語的を問わない）を受容した後の推論過程で起こる心理的な反応をとりあえず音声的に表現したものの。他のいかなる文要素にも先立つ」 (大浜 (2001), p.162)

「心理的な反応」が本稿における心内処理と類似していると思われるが、どの

ような反応を示しているのか説明がされていない。他の感動詞との違いを把握するためにはどのような心内処理が背後に存在するかが問題となってくる。

ただ、「受容した後の推論過程」としているので、その点は田嶋・金水(1997)のポインター作成、森山(1997a)の遭遇事態についての探索、と概念的には近いのではないだろうか。

4.2. 分析：「ええ↑」

田嶋・金水(1997)では「えっ」「はっ」「へえ」等を「専ら対話のみに用いられる」(p.266)としている。また、大浜(2001)が「いかなる文要素にも先立つ」としているが、これらの指摘には反例が考えられる。

(30) (部屋に戻ったら物が何もかも無くなっているのを見て)

ええ↑ なんで？

(31) A 11日はどこに行くんですか？

B 17日は…、ええ↑ 11日ですか？ 11日はもう過ぎてますよ。

(32) A あ、その本取って。

B ええと、…ええ↑ これ？

(30) は独り言の状況、(31)(32) は発話途中で用いられる「ええ↑」である。いずれも特に問題なく自然であると思われる。「ええ↑」(「え↑」)が対話専用であるという捉え方には疑問の余地がある。検索の「ええ→」と同様に、対話という場面には制約を受けないといえる。

また、森山(1997a)が指摘した「疑問後続」は感動詞の上昇調イントネーションに与えられる意味であるが、「ええ↑」に関してはその疑問の内容にさらに制約がある。

(33) a ええ↑ 何で言ってんの？

b ええ↑ 何言ってんの？

「何で言ってんの」は反復要求表現で、聞き取れなかったことを聞き返す表現である。「何言ってんの」も同じ反復表現であるが、「何言ってんの」には何らかの皮肉・非難めいたニュアンスが含まれていると解釈できる。

肯定の「ええ↓」で挙げたイントネーションパターン2もそうであるが、皮

求めいたニュアンスはその背後に高度な知識（処理）を必要とする。微妙な差異であるが、(33)で「ええ↑」が「何言ってんの」とよりしっくりくる組み合わせであることは、獲得した情報に対する複雑な処理が「ええ↑」の発話の背後に存在していることの傍証となる。

富樺（2000）では、「え？」と「は？」の差異として(34)の例を提示した。Aの発話を受けて「どこの」という補足情報を要求するとき、「え？」は自然であるが、「は？」は不自然である。これは長音化形「ええ↑」「はあ↑」でも同様である（(35)）。

(34) A ところで昨日ね、学会に行ってきたんだ。

B 1 え？ どこの？

B 2 ??は？ どこの？

(35) a ええ↑ どこの？

b ??はあ↑ どこの？

つまり、「は↑」「はあ↑」と比較すると、「え↑」「ええ↑」は与えられた情報を把握した上での補足情報の問い合わせであることが分かる。このことは、肯定の「ええ↓」が有意な情報が前提となっていたのと同じく、補足情報の存在が導出できる程度の情報のまとまりが「ええ↑」には必要であるといえる。

したがって、肯定の「ええ↓」と同じような形での機能記述ができるだろう。

(36) 「ええ↑」：半活性情報との適切な関連性の確保に失敗したことの標示

まとまりを持った有意な情報との関連性を確認・確保させるために、データベースにアクセスする。その処理の結果、関連性が確保できなかったことを「ええ↑」が示すのである。その意味では、肯定の「ええ↓」と問い合わせの「ええ↑」は同じ手順の処理で、最終的な処理（関連性の確保）の成功／失敗がその区別となっているのである。

ただし、本節で指摘した「ええ↑」の特徴は実際には「え↑」のほうが現れやすい。「ええ↑」の場合、丹念に処理をしたが結論が出なかったといったような解釈が可能なため、「ええ→」と同様に長音化というモジュールが検索を担っていて、上昇調イントネーション "↑" が処理の失敗を示すと考えることもできる^{*12}。

また、上記の記述をした場合、物理的不可聴における問題が顕在化する。

(37) A ……に……る。

B ええ↑

Aの発話が情報的にまとまったものではない（少なくともBにとっては）。にもかかわらず「ええ↑」が許容されるのは、(36)の記述からは一見反している。しかし、この場合は聞き手の「まとまった情報として受け取りたい」という意識が関わってくると考えられる。これは派生的な用法として位置付けられるといえる。

5. 「ええ」の統一的記述の可能性

ここまで、3種の「ええ」の機能を考察・分析してきた。本節ではその結果から、感動詞「ええ」の統一的記述を試みる。

3種の「ええ」は情報の獲得をきっかけとしたデータベースへのアクセスという点で共通している。さらに言えば、獲得する情報は何らかの形でまとまり・有意性を持っていなければならない。でなければ、データベースにアクセスしても適切な処理ができないからである。「ええ」の特徴はこの2点に集約される。この処理の成功の可否がイントネーションの選択を変える。例えば、データベースにおいての関連性が確保されれば、下降調イントネーションが選択され、「ええ↓」という形態になる。

したがって、「ええ」そのものを、データベースへのアクセス標示と位置付けることに異論を挟む余地はなく、感動詞「ええ」の機能を以下のように記述することができるだろう。

(38) 「ええ」の機能：まとまった情報を獲得した上で、データベースへのアクセスを標示する

一見、全く異なる振る舞いを見せる3種の形式の共通点を、心内処理の観点から導出することができるのである。

本稿ではイントネーションの機能に言及する余裕がなかったが、「ええ」の機能と3種の「ええ」の機能記述から逆算すると、おおよそ以下のように考え

られるだろう。下降調イントネーションは処理の完了・確定、上昇調イントネーションは処理の未完了・失敗を標示する^{*14}。これらが結果として、断定や疑問という解釈へと結びついていくといえる。また、高平調イントネーションは直前の処理の継続を示す^{*14}。

「ええ↓」「ええ→」「ええ↑」の機能は、共通の形式「ええ」に、下降、高平、上昇というそれぞれ別の機能を持つモジュールが組み合わされた結果なのである。

6. 残る課題

「ええ」の本質を半活性の情報領域との関係に求めたのであるが、少なからず問題も残っている。富樫（2002a, b）では、「ふーん」「はい」「うん」という感動詞・応答詞の分析を試みた。いずれにおいても半活性情報（データベース）との関連を指摘できた。では、本稿での「ええ」と、「ふーん」や「はい」との異なりをどのように説明すればよいのか。

おそらくは、データベースへのアクセスの手順の違いによるといえるのではないだろうか。「ええ」はまとまった情報の存在が前提である。つまり、手にした情報の置き場所・位置付けを求めてデータベースへとアクセスするわけであるが、「ふーん」や「はい」等は情報をひとまず置いておいて、置き場所の確保・整理を優先させるのではないか。情報の吟味をすることなしにデータベースに置き場所を求めるのが「ふーん」「はい」であり、「ええ」との違いもそこに存在すると思われるのである。しかし、詳細な検討は今後の課題となる。

また、それぞれの独立したモジュールの機能も求めるべき課題である。本稿で取り上げた、イントネーション（音調変化）や長音化のみならず、促音化やH化といったモジュールも視野に入れる必要がある。例えば、促音要素を組み込むと、「ええっ↓」「ええっ↑」はより強い否定や問い合わせの解釈になるが、検索の「ええ→」に促音要素を組み込むことはできない。つまり、検索という概念と促音化が示す何らかの機能が相反するものである可能性が考えられるのである^{*15}。このような点も含めて分析していかなければならない。

注

- * 1 先行研究においては、肯定応答の「ええ」を応答詞・応答表現のカテゴリーで扱っているものが多いが、本稿では肯定応答だけでなく、検索中を示す表現も包括して分析するため、感動詞という呼称で統一する。
- * 2 本稿で言う「機能」とは話し手の心内処理と形式との関係である。その点では形式に内在する「意味」と同じであり、場面・状況における用いられる方である「用法」とは異なる。本質的な機能の導出とは、個々の形式に対応する固有の心内処理を明らかにすることである。
- * 3 より厳密な記述を求めるとなると、構成要素「と」の有無にも目を向けなければならない。微妙な判断ではあるが、「と」が付いたほうが、検索処理後の確定というニュアンスが強いように思われる。
 - (a) ええと, 3579.
 - (b) ええ→, 3579.
- 検索標示後的情報「3579」を話し手が強く確信しているか否かが「と」の有無に関わっているのではないだろうか。「と」も感動詞を構成する一つの独立したモジュールとして捉えられるかどうか検討する必要がある。
- * 4 ただし、定延・田窪（1995）の心的データベースは話し手の知識の総体といった意味合いが強く、富樫（2002a）の規定するいわゆる semiactive な情報（半活性情報）が収まる領域とは多少の範囲の異なりがある。
- * 5 他には日向（1980）、山根（1994）、McGloin（1998）、青柳（2001）等がある。
- * 6 逆に、「高い山→低い山」というイントネーションパターン1では、例えば、相手の話に納得して繰り返し頷く等、「はい」「うん」とともに自然となる。
- * 7 イントネーションパターン2そのものにアイロニカルな解釈が生じることから、その適用が可能な「はい」は、より高度な知識の処理を前提としていることが分かる。なお、イントネーションパターン2については定延（2000）も参照されたい。
- * 8 (22) に比して、(23) で「ええ↑」が問題なく許容されるのは、真偽疑問文だからである。疑問詞疑問文と違い、真偽疑問文は情報的なまとまりを有している。
- * 9 「え↑」と「ええ↑」にニュアンスの違いがあることは確かであるが、それが「ええ」の機能導出の妨げになるとは考えない。なお、同様の違いが見られる形式として「は↑」がある。「は↑」と長音化形「はあ↑」にもかなりのニュアンスの差が認められる。
- * 10 他には例えば、尾崎（1992）や堀口（1997）がある。しかし、これらの論考では問い合わせの行動ストラテジーの分類に主眼があり、「え↑」や「は↑」のような形式自体の機能記述は行われていない。
- * 11 この「未完了」という概念は、小林（1996）が感動詞「え」の本質として記述した「談話の進行を一時中断する機能」(p. 6) にも近いといえる。
- * 12 長音化形「ええ↑」には別の側面もある。
 - (a) A 今日はこれからテストをします。
B えーっ。

このように、驚き表明のための形式として用いられる場合もあり、聞き返しや

- 意外といった解釈はそれほど強く現れない。
- *13 森山 (1997a)においても上界イントネーションの意味を、「情報としての非充足性」(p.81)といったものを表示すると指摘している。
- *14 音調変化を生じさせない「ええ→」がデフォルトの形式として位置付けられる可能性もある。データベースへのアクセスはその後の結末を含意していないので、アクセスしたままということになる。アクセスが完了した時点で“↓”と“↑”のどちらかが選択される。デフォルトのモジュールとしての“→”の可能性も考えるべきだろう。
- *15 ただし、「ええと」には促音が入りうるので(「ええっと」「えっと」),検索という概念だけと関わっているわけではないかもしない。

参考文献

- 青柳にし紀 (2001) 「「はい」と「ええ」の意味・機能 一音声、イントネーションの視点からー」『信州大学留学生センター紀要』2, pp.23~34, 信州大学留学生センター,
- 石神照雄 (1981) 「感動詞について」『信州大学教養部紀要』15, pp. 1~11, 信州大学教養部,
- 梅原恭則 (1978) 「感動詞小考」『文学論藻(東洋大学文学部紀要第32集 国文学篇)』53, pp.94~111, 東洋大学文学部国文学研究室,
- 大浜るい子 (2001) 「「えっ」の談話機能」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』50, pp.161~170, 広島大学大学院教育学研究科,
- 尾崎明人 (1992) 「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」, カッケンブッシュ寛子他 (編)『日本語研究と日本語教育』, pp.251~263, 名古屋大学出版会,
- 北川千里 (1977) 「「はい」と「え、」」『日本語教育』33, pp.65~72, 日本語教育学会,
- 金水 敏 (1983) 「感動詞」, 大曾根章介他 (編)『研究資料日本古典文学12 文法』, pp.131~134, 明治書院,
- 小林可奈子 (1996) 「感動詞についての一考察」『鹿児島短期大学研究紀要』58, pp. 1~11, 鹿児島短期大学,
- 小林可奈子 (2001) 「感動詞について・再考」『都大論究』38, pp.72~83, 東京都立大学国語国文学会,
- 定延利之 (2000) 「韻律パターンが発話音調に反映されるかどうかは何かが決めるか? : 準備的考察」CREST 意味構造グループ研究報告. (<http://ces.cla.kobe-u.ac.jp/Gengo/ja/link/CREST/jpn/substance/sadanobu/index.htm>)
- 定延利之 (2001) 「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」「日本語文法」Vol. 1, No. 1, pp.111~136, 日本語文法学会,
- 定延利之 (2002) 「「うん」と「そう」に意味はあるか」, 定延利之 (編)『「うん」と「そう」の言語学』, pp.75~112, ひつじ書房,
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構 一心的操作標識 「ええと」「あのーーー」」『言語研究』108, pp.74~93, 日本言語学会,
- Schiffrin, Deborah(1987) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University

Press.

- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」、音声文法研究会(編)『文法と音声』, pp. 257-279, くろしお出版。
- 土屋菜穂子 (2000) 「感動詞の分類 一対話コーパスを資料としてー」『青山学院大学文学部紀要』41, pp. 239-255, 青山学院大学文学部。
- 富樫純一 (2000) 「「え?」と「は?」の談話機能」「平成12年度国語学会秋季大会発表要旨集」, pp. 46-53, 国語学会。
- 富樫純一 (2001) 「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6, pp. 19-41, 筑波大学文芸・言語研究科。
- 富樫純一 (2002a) 「談話標識「ふーん」の機能」『日本語文法』Vol. 2, No. 2, pp. 95-111, 日本語文法学会。
- 富樫純一 (2002b) 「「はい」と「うん」の関係をめぐって」, 定延利之(編)「「うん」と「そう」の言語学」, pp. 127-157, ひつじ書房。
- 富樫純一 (2004) 「日本語談話標識の機能」筑波大学博士学位論文(未公刊)。
- 中島悦子 (1999) 「応答詞疑問表現の諸相」『ことば』20, pp. 181-190, 現代日本語研究会。
- 中島悦子 (2000) 「応答詞疑問表現の機能」『国士館短期大学紀要』25, pp. 57-84, 国士館短期大学人文学会。
- 仁田義雄 (1997) 「未展開文をめぐって」, 川端善明・仁田義雄(編)『日本語文法体系と方法』, pp. 1-24, ひつじ書房。
- 日向茂男 (1980) 「談話における「はい」と「ええ」の機能」「国立国語研究所報告65 研究報告集2」, pp. 215-229, 秀英出版。
- 堀口純子 (1997) 「日本語教育と会話分析」くろしお出版。
- McGloin, Naomi H.(1998) *Hai and Ee: An Interactional Analysis*. In Noriko Akatsuka, Hajime Hoji, Shoichi Iwasaki, Sung-Ock Sohn and Susan Strauss(eds.) *Japanase/Korean Linguistics*, Vol.7. pp.105-119. Stanford: CSLI.
- 森山卓郎 (1989a) 「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1, pp. 63-88, 大阪大学文学部日本学科(言語系)。
- 森山卓郎 (1989b) 「コミュニケーションにおける聞き手情報 一聞き手情報配慮非配慮の理論ー」, 仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』, pp. 95-120, くろしお出版。
- 森山卓郎 (1996) 「情動的感動詞考」『語文』65, pp. 51-62, 大阪大学国語国文学会。
- 森山卓郎 (1997a) 「一語文とそのイントネーション」, 音声文法研究会(編)『文法と音声』, pp. 75-96, くろしお出版。
- 森山卓郎 (1997b) 「「独り言」をめぐって 一思考の言語と伝達の言語ー」, 川端善明・仁田義雄(編)『日本語文法 体系と方法』, pp. 173-188, ひつじ書房。
- 山根智恵 (1994) 「「はい」, 「ええ」, 「うん」の形態と機能 一電話の会話をもとにー」『岡大国文論稿』22, pp. 346-354, 岡山大学文学部国語国文学研究室。
- 山根智恵 (2002) 「日本語の談話におけるフィラー」くろしお出版。